

高知県香南市発掘調査報告書 第7集

てらお  
寺尾遺跡

——中山間総合整備事業寺尾工区圃場整備工事に伴う発掘調査報告書——

2011.3

香南市教育委員会

てらお

# 寺尾遺跡

——中山間総合整備事業寺尾工区圃場整備工事に伴う発掘調査報告書——

2011.3

香南市教育委員会

# 序

香南市夜須町南部の手結周辺は、古代より土佐湾の重要港湾として栄えてきました。17世紀には野中兼山により改修され、石積に囲まれた港は350年以上経過した現在でも漁港として機能しています。また、平野部では、温暖な気候によりビニールハウスでメロン・トマト・ネギ等盛んに栽培されており、海岸より3kmほど入った寺尾地区においても、当遺跡発見のきっかけとなった岡場整備事業が実施され、現在では多くのビニールハウスが立ち並び農業の近代化が図られています。

寺尾遺跡発掘調査は、夜須町内で私共が唯一行った遺跡の発掘調査です。発見された2棟の竪穴住居跡は大変貴重な資料となりました。今後、あらたな調査により夜須町の歴史が解明されることを期待します。

本書は、香南市の歴史を広く知っていただくとともに、埋蔵文化財に対する一層のご理解をいただきますことを願って刊行するものです。文化財保護の資料として広く活用されれば幸いです。

最後になりましたが、高知県教育委員会、高知県埋蔵文化財センターをはじめ多数の方々のご協力をいただいたことに心からお礼申し上げます。

平成23年3月

高知県香南市教育委員会  
教育長 別役 朋之

## 例　言

1. 本書は、平成16年度に実施した中山間総合整備事業寺尾工区岡場整備工事に伴い夜須町（現香南市）教育委員会が実施した寺尾遺跡の立会調査報告書である。
2. 寺尾遺跡は、高知県香南市夜須町上夜須字寺尾784番地他に所在する。
3. 試掘調査は平成16年11月2日から11月17日に実施し、立会調査は平成17年3月14日から4月25日まで実施した。
4. 調査対象面積 22,000 m<sup>2</sup>  
　試掘調査面積 80 m<sup>2</sup>  
　立会調査面積 800 m<sup>2</sup>
5. 調査体制（平成16年度）

事務担当	山本真由美	夜須町教育委員会 主事
調査員	坂本 裕一	高知県教育委員会 文化財課 社会教育主事
	池澤 俊幸	高知県教育委員会 文化財課 社会教育主事
6. 遺跡の整理作業及び報告書作成作業は山本八也（生涯学習課 係長）と松村信博（香南市文化財センター主任調査員）が分担して行った。また、整理作業の一部については伊野広高（生涯学習課 主幹）の協力を得た。
7. 報告書刊行時（平成22年度）の香南市教育委員会生涯学習課文化振興保護係の体制は以下のとおりである。

課長	吉田 豊	嘱託職員	宮地 啓介
係長	山本 八也	臨時職員	小松 経子
主任調査員	松村 信博	〃	宮本 幸子
主監	竹中 ちか	〃	水田 紀子
		〃	齋藤 美幸
8. 本書の編集は山本が行った。執筆分担は以下の通りである。  
　第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ章（山本）、遺物観察表及び遺物写真（松村）
9. 遺構面より上の土の取り除き及び掘削土の運搬については四国開発株式会社の協力を得た。
10. 遺物整理、報告書作成においては下記の方々の協力を得た。記して感謝の意を表したい。  
　小松経子・宮本幸子・水田紀子・齋藤美幸
11. 下記の方々には現地での調査、報告書作成過程を通じて貴重なご助言・ご教示をいただいた。  
　記して感謝する次第である。（敬称略・所属は2010年度）  
　出原恵三（高知県埋蔵文化財センター）、坂本裕一（南国市教育委員会）
12. 出土遺物、写真その他図面類の関係資料は香南市文化財センター（香南市香我美町山北1553-1）で保管している。

## 本文目次

第Ⅰ章 調査の経緯及び方法 .....	1
第1節 調査の経緯 .....	1
第2節 試掘調査 .....	2
第3節 調査の方法 .....	9
第Ⅱ章 遺跡周辺の地理・歴史的環境 .....	11
第Ⅲ章 調査の成果 .....	14
第1節 A区 .....	14
第2節 B区 .....	18
第3節 試掘調査時の出土遺物 .....	28
第Ⅳ章 まとめ .....	30

## 挿図目次

第1図 香南市及び寺尾遺跡位置図 .....	1
第2図 調査区位置図 .....	2
第3図 試掘調査地点位置図 .....	3
第4図 試掘坑土層模式図（1） .....	5
第5図 試掘坑土層模式図（2） .....	7
第6図 立会調査位置図 .....	10
第7図 周辺の遺跡分布図 .....	12
第8図 立会調査・試掘坑TP5配置図 .....	15
第9図 A区東遺構配置図 .....	16
第10図 A区西遺構配置図 .....	17
第11図 ST1平面・セクション図 .....	19
第12図 ST1炭化物検出状況実測図 .....	20
第13図 ST1出土土器実測図 .....	21
第14図 ST1出土石器実測図（1） .....	22
第15図 ST1出土石器実測図（2） .....	23
第16図 ST1出土石器実測図（3） .....	24

第17図 ST1 出土石器実測図（4）	25
第18図 ST1 出土鉄器実測図	26
第19図 包含層出土遺物実測図	27
第20図 TP5（ST2）出土上器実測図	28
第21図 試掘調査包含層出土遺物実測図	29

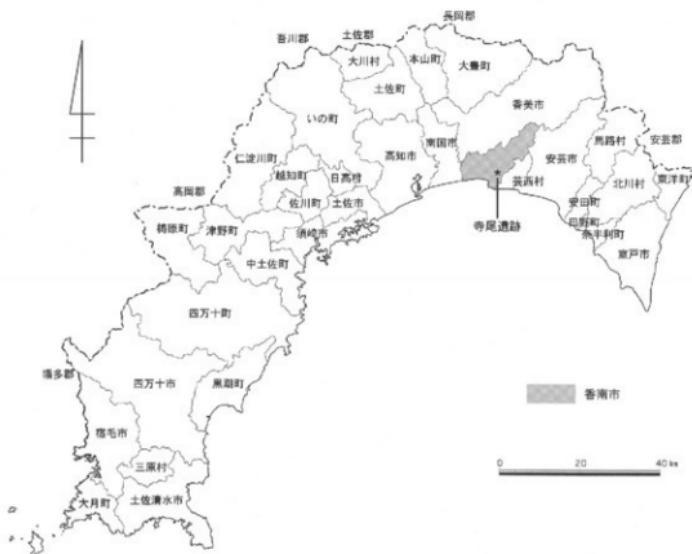
## 表目次

表1 周辺の遺跡地名表	12
表2 ST1ピット集計表	19
表3 遺物観察表（弥生土器・瓦質土器・近世陶磁器）	33
表4 遺物観察表（石器）	35
表5 遺物観察表（鉄器）	36

# 第Ⅰ章 調査の経緯及び方法

## 第1節 調査の経緯

夜須町（現香南市夜須町）が計画している中山間地域総合整備事業寺尾工区圃場整備工事に伴い、埋蔵文化財の保護と開発事業の調整を図るために、夜須町（現香南市）教育委員会が主体となって、平成16年11月事業予定地について試掘調査が行われ、新たに寺尾遺跡が発見された。

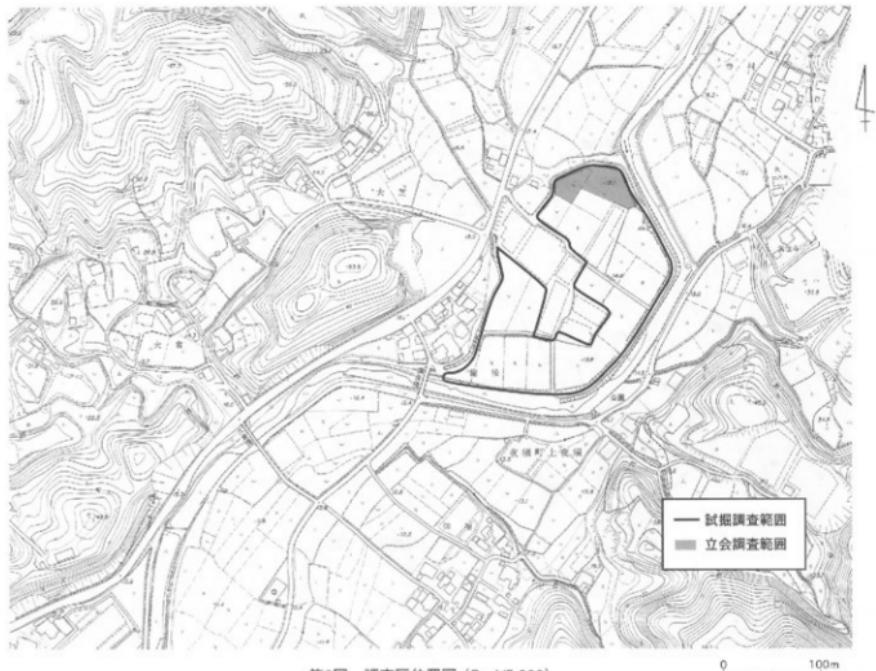


第1図 香南市及び寺尾遺跡位置図

## 第2節 試掘調査

試掘調査は、平成16年11月2日～17日の間、調査対象面積22,000m<sup>2</sup>内に任意の試掘坑（TP）を17箇所設定し、耕作土を重機を使い除去したのち、人力を併用して遺構・遺物の発見に努めた。

結果は、そのほとんどで砂礫の上に砂質の強いシルト層が厚く堆積するため、夜須川の旧河道とそこに合流する山體からの谷が埋没したと思われる。部分的に土師質土器片や弥生土器片を含む層が確認できたが、遺物の多くは磨耗が著しく上流または山際からの流れ込んだものと考えられる。しかし、TP1・2・5・7・8・14・17では多くの遺物を含む包含層が確認され、TP5では竪穴式住居跡（ST2）と思われる遺構を、TP8・14では柱穴を検出した。



第2図 調査区位置図 (S=1/5,000)



第3図 試掘調査地点位置図 (S=1/1,500)

## (1) 各TPの調査結果

### TP1

調査区北西部に設定した。周囲より一段高く丘陵の先端部にあたる。遺構は検出できなかった。包含層が二層存在し、Ⅱ層に須恵器片と中世土器片を含む。Ⅳ層は土師器片と弥生土器片を多く含み、大型蛤刃石斧が一点出土した。地表下80~110cmで地山風化礫層となる。地山面は南方向に傾斜し埋没した丘陵先端部とみられる。

### TP2

調査区北端部に設定した。遺構は検出できなかったが炭化物や弥生土器片を多く含む層（Ⅱ層）が比較的良好に存在する。

### TP3

TP2の東側に設定した。灰色または灰黄色シルトの堆積であり、地表下約100cmで砂礫層となる。遺構は検出できなかった。遺物はⅡ層から弥生土器片が2点出土したのみである。

### TP4

TP3の南西側に設定した。遺構は検出できなかった。遺物はⅡ層から土師器細片が1点出土したのみである。

### TP5

TP2南側に設定した。竪穴住居跡と考えられる遺構断面を検出した。Ⅳ層に掘り込まれており、竪穴状遺構ST2を確認した。遺構埋土中に炭化物、焼土、弥生土器片を含む。平面プランは遺構の規模が大きいため、TP内では確認できなかったが遺構検出面の上層に良好な包含層（Ⅲ層）が残存しているため、周囲に同様の遺構が残存する可能性が高い。

### TP6

TP5東側（川側）に設定した。灰色シルトを主体とした堆積であり、地表下115cmで砂礫層となる。遺構は検出できなかった。遺物はⅡ層から土師器片が1点出土したのみである。

### TP7

TP5南側に設定した。遺構は検出できなかったが、灰色シルトを主体とした包含層（Ⅲ~Ⅶ層）が良好に残存する。特にV層は遺物の密度が高い。Ⅳ層は堆積土に縮りがあり上面は生活面として遺構が存在する可能性が高い。

### TP8

TP7東側（川側）に設定した。Ⅳ層上面でピット6基を検出した。TPの壁面観察から遺構の掘り込みはⅢ層上面からである。Ⅲ層と遺構理上の色調が似通っているため、Ⅳ層上面での検出となった。ピットの埋土はすべて暗灰褐色粘土質シルトである。掘立柱建物跡の柱穴群と思われるが、規模等については検出範囲が狭いため不明である。

SP1は直径32cm、深さ34cmを測る。TP壁面に断面が残存しており、本来の掘り込み面であるⅢ層上面では直径48cm、深さ52cmを測り、掘方は段を持つ。出土遺物は土師器細片10点である。



※数字はcm。地表から層位下面までの深さ。

第4図 試掘坑土層模式図(1)

SP2は直径26cm、深さ30cm以上を測る。埋土中から土師器細片3点が出土した。

SP3は直径13cm、深さ22cmを測る。出土遺物は土師器細片3点であり、うち1点は口縁部片である。

SP4は直径31cm、深さ30cmを測り、段を持つ掘方である。段から下部は直径14cmを測り、底に向かって径を減じる。出土遺物は土師器細片6点である。

SP5は直径52cm、深さ56cmを測り、掘方は段を持つ。段から下部の深さは35cmを測り、底に直径16cmを測る柱痕を検出した。出土遺物は土師器細片の他、糸切痕のある底部片が1点出土した。

#### TP9

TP8東側（川側）に設定した。遺構は検出できなかった。遺物はⅡ層から土器細片がわずかに出土したのみである。

#### TP10

TP9南側に設定した。地表下約120cmで砂礫層となる。全体に北側に傾斜した状態で堆積するため埋没した旧流路と思われる。遺構は検出できなかった。遺物はⅢ層から弥生土器底部片が1点出土した。

#### TP11

TP10の東側に設定した。灰色シルトを主体とした堆積状況であり、地表約44cmで砂礫層となる。遺構は検出できなかった。遺物は微細片が1点出土したのみである。

#### TP12

調査区南東部に設定した。灰色シルトを主体とする堆積状況であり、地表下約90cmで砂礫層となる。遺構、遺物は検出できなかった。

#### TP13

調査区南端に設定した。灰色シルトを主体とする堆積状況であり、地表下約90cmで北側に傾斜した砂礫層となる。遺構、遺物は検出できなかった。

#### TP14

調査区西南部に設定した。灰色シルトを主体とする堆積状況である。Ⅶ層上面でピット9基、溝状遺構2条を検出した。TPの断面観察から遺構の掘り込みはⅧ層上面からである。検出プランが不明瞭であるが半裁を行い、断面で掘方が確認できた。

SP1はサブトレーンチで検出した。一辺18cm、残存する深さ16cmを測る。埋土は豊富な地下水を受けたと見られ、灰色粘土である。埋土中に5cm大の円礫が投げ込まれており、底は砂質が強く、小礫も多く含まれる。遺構は検出できなかった。中央部に直径3cm、残存長9cmを測る木杭が検出された。

SP2は西壁断面で確認した。直径33cm、深さ25cmを測り、掘方は段を持つ。段から下部は直径13cm、深さ15cmを測る。埋土は段から上部が灰色粘土質シルト、下部が灰褐色粘土質シルトである。

SP3はサブトレーンチ底で検出した。直径約23cmを測る。深さは数cmでピット底の部分がわずかに残存したものと思われる。遺物は出土しなかった。

SP4は直径25cm、深さ15cmを測り、埋土は灰色粘土質シルトであり、炭化物を含む。出土遺物は土師器細片が3点である。検出プランは円形と思われたが、断面形状からSD1の一部である可能性が高い。

## TP15 西壁

I. 純作土。	↓20
II. 灰色シルト。橙色斑。	↓35
III. 灰色シルト。土器細片含む。底にFe沈着し硬化する。	↓55
IV. にぶい黄褐色砂質シルト。小円礫含む。V. 極灰色砂層。	↓71
VI. ダケ石混じる砂層。	↓86
VII. 濃色砂層。	↓101
VIII. 砂礫。	↓116

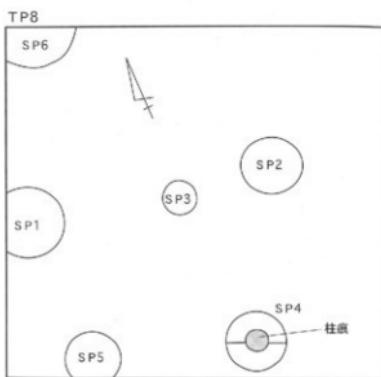
## TP16 西壁

I. 純作土。	↓20
II. 灰色シルト。橙色斑。	↓35
III. 黄褐色粘質シルト。土器片含む。	↓60
IV. 灰色粘質シルト。Fe酸化橙色強い。	↓75
V. 淡黄色粘質シルト。Fe酸化橙色強い。	↓85
VI. 黄褐色シルトにダケ石混じる。	↓105
VII. 砂礫。	↓115

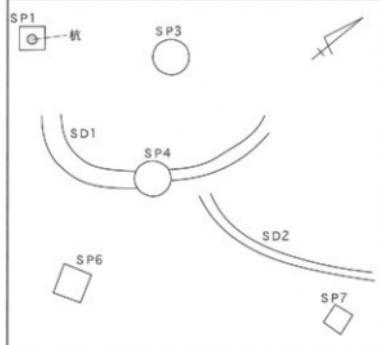
## TP17 西壁

I. 新作土。	↓15
II. 灰色シルト。橙色斑。	↓25
III. 灰褐色シルト。	↓50
IV. 雜灰褐色粘質シルト。炭。土器斑含む。	↓70
V. にぶい黄褐色砂質シルト。	↓85
VI. ダケ石混じる黄褐色シルト。(山土)	↓105
VII. 砂礫。	

検出遺構模式図



## TP14



第5図 試掘坑土層模式図(2)

SP5は検出したが半裁の結果、自然の窪みであることを確認した。

SP6は一辺約20cm、深さ20cmを測る。埋土は褐灰色シルトで炭化物を含む。遺物は出土しなかった。

SP7は一辺14cm、深さ20cmを測る。埋土は褐灰色シルトで炭化物を含む。遺物は出土しなかった。

SD1は幅22cm、深さ15cmを測る。断面形状は丸底で、埋土は灰色粘土質シルトである。検出プランは非常に径の小さい弧状であり、枝分かれをしたようにSD2が延びるため、樹木の痕跡の可能性もある。

### 試掘調査のまとめ

調査対象地区は夜須川河口から約2.7km上流の右岸に位置し、西側山麓から開口した谷が夜須川に合流する部分に当たる。調査はビニールハウスが建つ圃場整備対象外区域を除く部分に17ヶ所の試掘坑（TP）を設定した。結果は、TP5では弥生時代の竪穴状遺構、TP8では古代後期から中世と考えられる掘立柱建物跡の柱穴群、TP14では詳細な時期は不明であるが柱穴群が検出された。また、調査区の北側で比較的良好な弥生時代～中世の包含層が確認された。遺構と包含層が確認された地点は、調査区西側の山地から延びる丘陵の先端部にあたり、夜須川の氾濫などの水害を受けにくい立地条件であったと考えられ、弥生から中世の遺構の広がる可能性が高い。調査区中央部には遺構は検出できず、出土した遺物は磨耗が著しいため、周辺から流れ込んできたものと考えられ、西側山地からの谷が夜須川に合流する部分と考えられる。

遺構検出面は地表から60～80cmの深さにあり、上面には包含層も存在するため、圃場整備事業における設計によっては影響を受けることが判明した。このことから、事業担当課と協議を行い、実施設計の地盤高から試掘調査結果での遺跡に影響を及ぼす範囲を検討した。その結果、試掘調査で確認した遺跡には影響は及ぼさないと結論に達した。しかしながら、北端部800mの地盤切り下げを行う部分は遺跡は確認していなかったが、立会調査を行うこととなった。

尚、出土遺物の詳細については第Ⅲ章第3節で述べることとする。

### 第3節 調査の方法

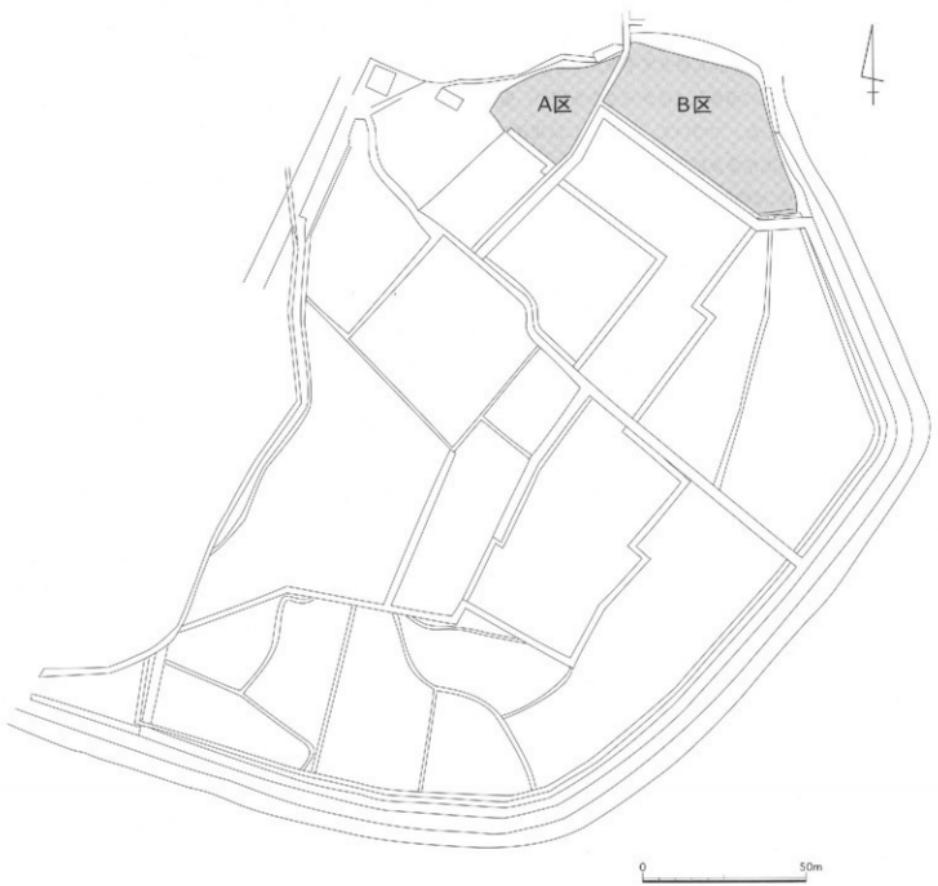
立会調査対象区は、現況地盤高は東側17.77m、西側17.57mの土であった。圃場整備工事実施後の高さは双方17.2mであり、東0.65m、西0.43mの切り下げ後に0.15mの表土を敷く計画であった。このことから、工事の進捗に併せて平成17年3月14日から立会調査を開始した。

調査対象区の西部分A区から立会を行い、遺構が確認されたため翌3月15・16日の2日で検出作業及び実測を行った。つづいて、3月30日には東部B区の立会を行い、竪穴住居跡ST1を確認し、3月31日・4月4日で検出作業及び実測を行った。

4月25日には圃場整備工事区域内中央部西の水路設置区間の立会を行い調査を終了した。

#### [参考文献]

夜須町教育委員会「高知県香美郡夜須町寺尾地区試掘確認調査概要報告書」2004年



第6図 立会調査位置図 (S=1/1,500)

## 第Ⅱ章 遺跡周辺の地理・歴史的環境

香南市は高知県中央部の東端に位置し、平成18年3月に5町村（赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村）が合併して誕生したまちで、人口34,555人（平成22年12月現在）、南部海岸線約8km、北東方向約18km、面積126.49km<sup>2</sup>である。四国山地の劍山系白髮山に源を発し、高知平野東部を南西方向に流れ、香南市吉川町で土佐湾に注ぐ延長約71kmの一級河川である物部川の左岸に位置している。市内中央部には二級河川である香宗川、東部には夜須川が流れ、これらの河川により形成された扇状地や沖積平野などが広がっている。

寺尾遺跡のある香南市夜須町は、北部は海岸より北東12kmにある長者が森（標高770m）を主峰にした標高600～700mの山脈地帯で、南部は標高約400m丘陵地から、東西に並行して緩やかに走る山脈と夜須川の沖積平野からできている。南部の平野では、温暖な気候を活かしたビニールハウス栽培が盛んに行われており、なかでも夜須のエメラルドメロンはブランド化に成功し、県内有数の名産品となっている。

東西両山脈の海岸に近い麓には、河岸段丘が発達し古くから屋敷として利用されていた。近年、東部の海岸線に面した手結山地区では、土佐湾を望む丘陵地に別荘やホテル・ゴルフ場といったリゾート地域に変貌している。

現在、香南市の遺跡数は163箇所であり、そのうち夜須町内には42箇所の遺跡が確認されている。その中でも香南市最古の遺跡が夜須町の手結遺跡である。昭和34年に手結港東側の標高30mの仏が崎背後の松林の中で、縄文時代草創期とみられる古銅輝石安山岩製の有舌尖頭器が地元の中学生によって発見された。縄文時代の遺跡は夜須町では手結遺跡のみ、香南市全体でも後期の上器片が確認された坪原遺跡、晚期の貯蔵穴の確認された十万遺跡、晩期末の突堤文土器が採集された深瀬遺跡の4遺跡があるが、貯蔵穴以外は1～数点の断片的な出土状況である。夜須町で次に人間の菅みが確認されるのは弥生時代後期になってからである。弥生時代後期中葉の竪穴住居跡が確認された夜須町唯一の遺跡が、この寺尾遺跡である。その他では平成16年・17年に発掘調査が行われた口横ヶ谷遺跡の2箇所である。

古墳時代にはいると夜須町内にも古墳が築かれるようになる。加治ヶ山古墳とノツゴ古墳が記録にあるが、現在は破壊されて不明である。もうひとつの上居山古墳についても、平成22年に既存施設建て替え時に立会を行ったが古墳は確認できず不明である。

古代に入ると夜須川右岸一帯にも条里制地割により灌漑用水路が発達し稻作がおこなわれている。交通面では、手結港が南東に山を持つ自然港として、土佐日記の時代には利用されており、現在の手結よりも北側の大字千切の南部字ウトノクチにあったとする説や、現在の手結港の少し西側にあったとする説があるが、直接の資料がないため定かではない。口横ヶ谷遺跡や平成18年度に発掘調査が行われた坪井遺跡では当該期の掘建柱跡が確認されており、律令制による香我美郡安浜郷に関係する建物の可能性を考えられる。その後、律令制から莊園制へと変わり安浜郷が夜須庄と呼ばれるようにな



第7図 周辺の遺跡分布図 (S=1/50,000)

表1 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	寺尾遺跡	弥生・中世	15	宗円城跡	中世	29	刈谷城跡	中世
2	口横ヶ谷遺跡	弥生～近世	16	伝大野城跡	中世	30	国吉城跡	中世
3	手結遺跡	旧石器	17	国光城跡	中世	31	十万遺跡	弥生～中世
4	奥谷遺跡	中世・近世	18	北屋敷遺跡	縄文～古墳	32	十万城跡	中世
5	加治ヶ山古墳	古墳	19	姫倉城跡	中世	33	東十万城跡	中世
6	坪井遺跡	古代・中世	20	クノ丸遺跡	中世	34	押原遺跡	弥生～中世
7	下夜須城跡	中世	21	徳善城跡	近世	35	岡城跡	中世
8	桜ノ城跡	中世	22	徳王子前島遺跡	中世	36	押原城跡	中世
9	西峯城跡	中世	23	徳王子広本遺跡	弥生～中世	37	岩神城跡	中世
10	中村遺跡	中世・近世	24	徳王子大崎遺跡	弥生～中世	38	江見遺跡	古墳
11	土居山古墳	古墳	25	花宴遺跡	弥生	39	御所の前遺跡	弥生～中世
12	ノツゴ古墳	古墳	26	徳善古窯跡群	平安	40	大東遺跡	古墳～平安
13	ツリガネガ森城跡	中世	27	徳善天皇古墳	古墳	41	ハザマ遺跡	弥生～中世
14	尼ヶ森城跡	中世	28	螢野古墳	古墳	42	下分遠崎遺跡	弥生

る。夜須庄は夜須町の南部三分の一を占める莊園で、北部三分の二は大忍庄の莊園であった。夜須庄は夜須七郎行宗が在地領主であったとされており、寺尾遺跡のある上夜須は夜須庄の北端に位置する。

夜須町は、高知平野東部の海岸線で唯一山が海まで迫り入り江を形成していることから、手結港として古く古代から土佐湾の重要な港として利用されてきた。上方へ往来する船の暴風時の避難港として野中兼山により慶安3年（1650）試験し、承応2年（1653）竣工し以来漁港商港として発展してきた。この手結内港は国内最古の掘り込み港として、今も原型をとどめている。

明治4年の戸籍法交付に伴う区制の施行により香美郡は28区に分けられ、夜須郷は3区に編成された。明治22年の市制町村制施行により夜須村、昭和18年に夜須町となり、昭和30年に細川・羽尾・沢谷・仲木屋を編入合併する。平成18年3月香南5町村が合併し現在に至る。

#### 〔参考文献〕

夜須町教育委員会「夜須町史」上巻 1984年  
下巻 1984年

## 第Ⅲ章 調査の成果

平成16年11月の試掘段階において、試掘坑TP5を調査した際、弥生時代後期中葉の上器が出土、焼土や炭化物の集中も確認され、竪穴住居跡1棟の存在が明らかになった。ST1（TP5）として調査されたこの竪穴住居は、夜須町内で初めて確認された弥生時代の竪穴住居である。試掘坑の範囲のみの調査のため、住居跡の規模は不明である。遺構検出面の深さが圃場整備により影響を受けないことが判明、ST1（TP5）については発掘調査対象とされず、現地に残されている。

ところが、平成17年3月の圃場整備立会調査の際、工事の影響を受ける地点から、新たに竪穴住居（立会②・ST1）が見つかり、発掘調査が行われることとなった。TP5と立会調査の竪穴住居跡は同じST1として報告されたが、全く別の遺構であり、本報告書では、「TP5のST1」を「ST2」と名称を変更して報告することとする。本報告で弥生時代後期中葉の竪穴住居ST1として報告する遺構は、立会調査時に見つかったものである。

圃場整備工事の進捗に併せて調査対象区西部を立会中にピットが検出しA区とした。調査対象区東部では竪穴住居跡1棟ST1が確認され、B区として調査区の設定を行い、A区から順番に発掘調査を進めた。A区ではピット数40基、古代の土師器片、石器が出土している。B区では弥生時代後期中葉の竪穴式住居跡ST1を確認し、ST1出土遺物は細片を含めて約1,065点が出土。大半が文様のない土器片であり、タタキ目が確認される破片も一定量確認されている。A区の遺構配置図は第9・10図に示す。

### 第1節 A区

#### P1

調査区東部に位置する。東西0.25m、南北0.25m、深さ8cmを測る。

遺物は円錐が2点出土している。

#### P3

調査区東部に位置する。東西0.33m、南北0.30m、深さ10.5cmを測る。

遺物は土師器片が1点出土している。

#### P5

調査区東部に位置する。東西0.37m、南北0.44m、深さ10cmを測る。

遺物は土師器片が1点出土している。

#### P6

調査区東部に位置する。東西0.25m、南北0.20m、深さ8.5cmを測る。

遺物は土師器が1点出土している。

#### P8

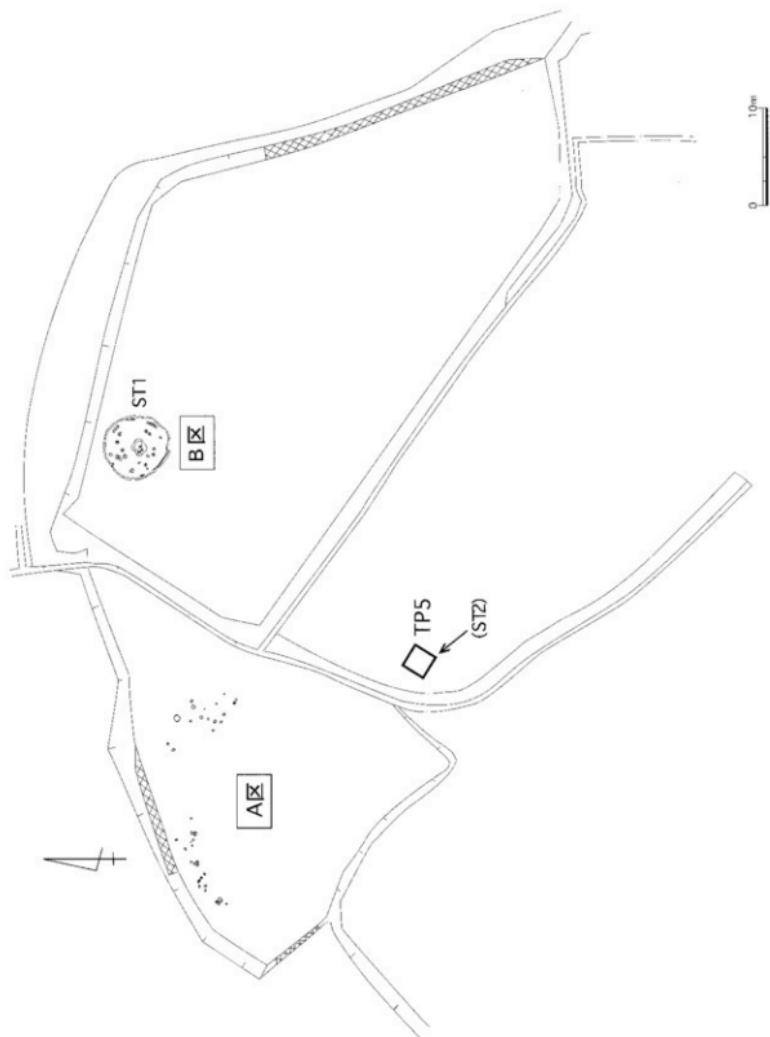
調査区西部に位置する。東西0.22m、南北0.23m、深さ8.5cmを測る。

遺物は縁が2点出土している。

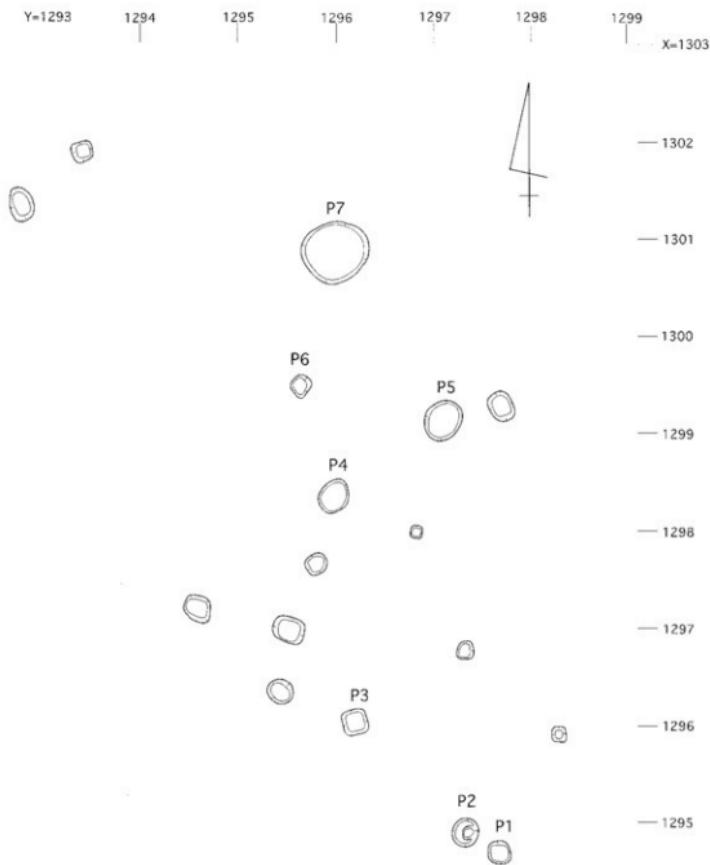
#### P9

調査区西部に位置する。東西0.26m、南北0.28m、深さ32cmを測る。

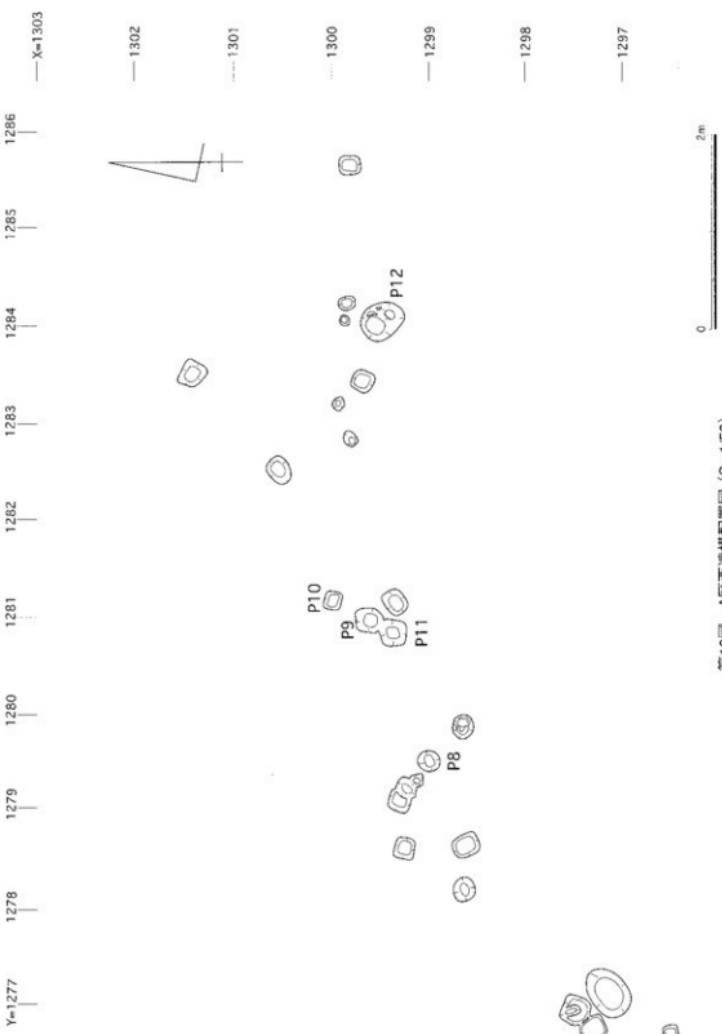
遺物は縁が2点出土している。



第5図 立会調査・試掘坑TP5配置図 (S=1/500)



第9図 A区東遺構配置図 (S=1/50)



第10図 A区西遺構配置図 (S=1/50)

## 第2節 B区

### (1) ST1

調査区西部に位置する。平面は円形を呈し、長軸6.9m、短軸6.4m、深さ約30cm、面積34.7m<sup>2</sup>を測る。遺構内には幅12~25cm、深さ4.5~8.7cmの壁構が5箇所認められる。埋土は第11図のとおりである。中央部には炭化物が多く混じっていた。床面からは14基のピットが確認できた。中央ピットは隅丸長方形を呈し、長軸1.75m、短軸1.25m、深さ17.5cmを測る。位置関係から主柱穴を求めればP1・P5間3.0m、P5・P7間1.1m、P7・P3間1.8m、P3・P9間2.74m、P9・P1間2.46mであり、主柱は5本と想定される。

表2 ST1ピット計測表

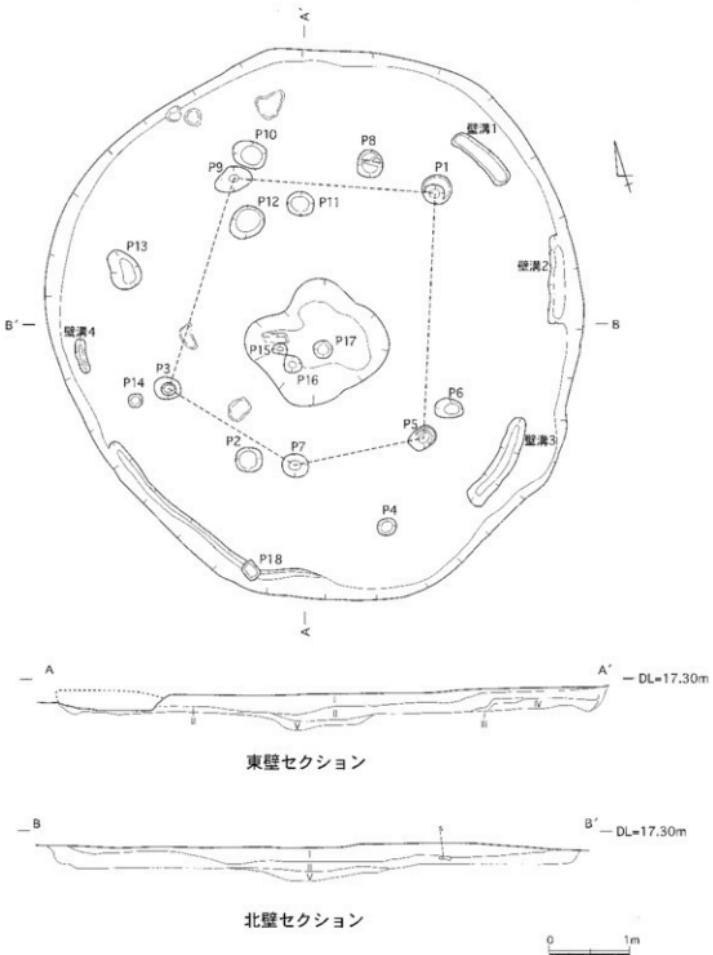
ピットNo	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態	ピットNo	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態
P1	径36	41	円形	P12	38×44	36	楕円形
P2	径32	23	円形	P13	36×50	16	楕円形
P3	27×33	14	楕円形	P14	径17	14	円形
P4	径22	15	円形	P15	14×18	3	楕円形
P5	25×34	30	楕円形	P16	径22	2	円形
P6	24×34	25	楕円形	P17	径22	31	円形
P7	28×32	34	楕円形	P18	18×22	10	楕円形
P8	径32	17	円形	甕溝1	20×84	5.5	
P9	31×46	21	楕円形	甕溝2	20×1.08	6	
P10	32×42	20	楕円形	甕溝3	24×1.22	9.3	
P11	径31	11	円形	甕溝4	12×42	4	

### 出土遺物（弥生土器）

ST1出土遺物は細片も含めて合計約700点、大半が文様のない土器片であり、タタキ目のある破片も定量確認されている。

図示し得た弥生土器は壺1点、甕8点、鉢1点、高坏6点の計16点である。(1)の壺は細頸壺で、白色鉱物を含み明るい褐色に発色する胎土の特徴から、搬入品（高松平野周辺の土器）だと考えられる。甕は8点だが、うち4点は口縁部の小片、3点は底部片であり、口縁～胴部にかけての形状が把握できる個体は(3)のみである。(3)にはタタキ目があり、口縁は屈曲した後短く外反する。甕の底部はいずれも平底で、口縁部小片は口唇が面をなすという共通の特徴を持つ。1点のみ出土した鉢(9)も平底で、楕状の形態である。

高坏は6点出土したが、坏部形状の把握可能な資料はなく、脚部のみが出土している。裾部が大きく開き端部は丸みを帯びた面に仕上げるもの(10・11)、裾部の開きは同様だが脚部端部が面をなし外端が拡張するもの(13)、器台に似た脚部形状で裾部の開きが小さく直線的なもの(16)に分かれれる。透孔もバラエティーがあり、透穴の確認できるもの(10・12・14・15)と確認できないもの(11・13)

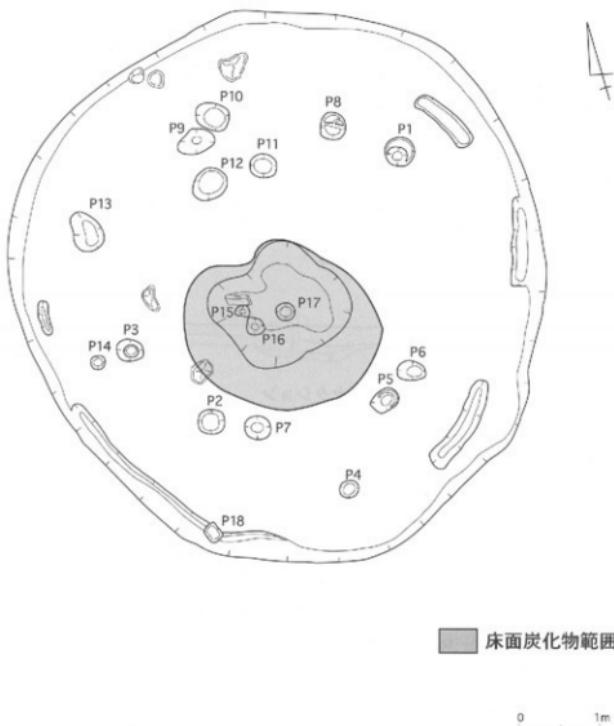


- I層 暗褐色シルトに2~3cm大の小礫を含む。
- II層 暗褐色粘質シルトに5mm~1cm大の小礫を含む。
- III層 暗褐色シルトに5mm大の小礫を含む。
- IV層 暗褐色に褐色シルトブロックが混じる。
- V層 黒褐色粘質シルトに炭化物が多く混じる。

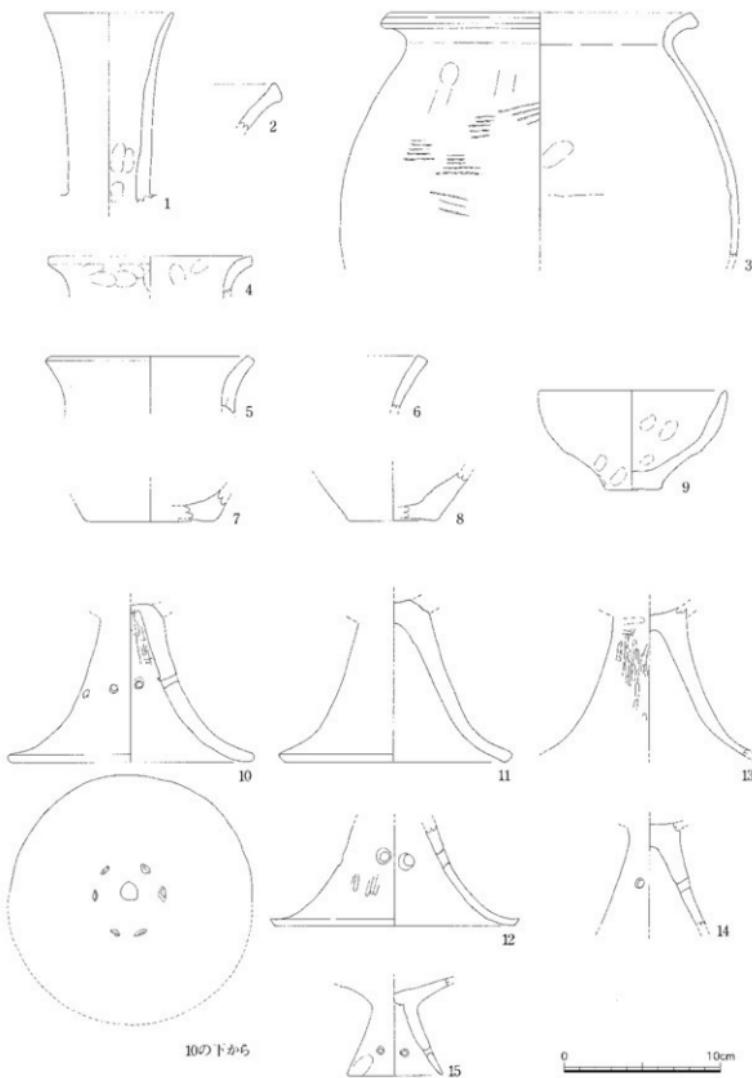
第11図 ST1 平面・セクション図 (S=1/60)

があり、2孔1対で合計6孔のもの（10）も存在する。高坏はすべて分割成形であり、底部粘土盤充填による個体は認められなかった。出土遺物全体にいえることだが、摩滅が顕著であり、はっきりと調整を捉えることが困難な個体が多くいた。

ST1は、鉢の出土量は少ないものの、銘々器である鉢が器種全体に占める割合が高くなる弥生時代後期中葉、土佐V-4期に属すると考えられる。V-4期の標式遺跡である深瀬遺跡ST3出土遺物とほぼ同時期であると考えている。



第12図 ST1 炭化物検出状況実測図 (S=1/60)



第13図 ST1出土土器実測図 (S=1/3)

## 出土遺物（石器）

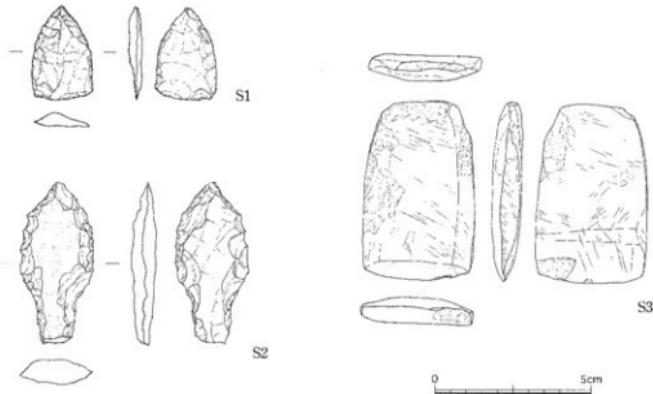
出土した石器類のうち、11点について図化した。器種は頁岩の扁平片刃石斧1点（S3）、サスカイトの削器（スクレイバー）1点（S11）、砂岩の敲石類（敲石・台石・砥石を含む）が7点（S4～S10）である。S11のスクレイバーのみが試掘坑出土資料で、それ以外はST1出土資料である。

また、図示していないがサスカイトの剥片が1点出土している。

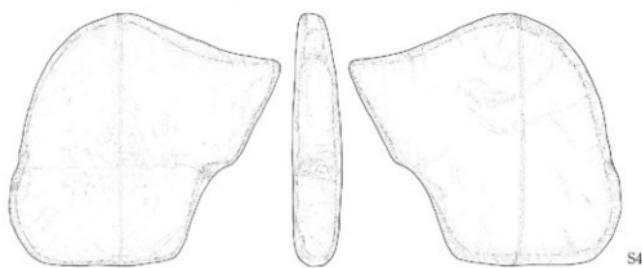
S11についてもST1と同時期である可能性が高く、確認された石器類はST1の所属時期である弥生時代後期中葉の遺物である。

## 打製石錫

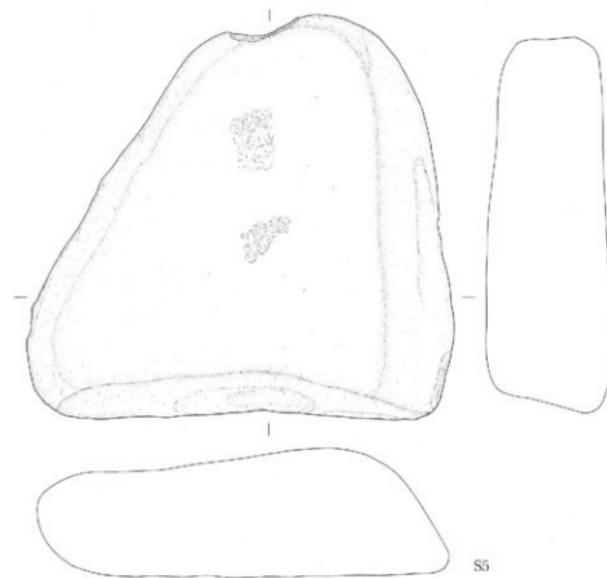
基部形状に特徴がある。1点は平基であり、もう1点は基部に有茎部を作り出す有茎打製石錫である。いずれも石材はサスカイトで、刃部は押圧剥離により形成される。平基の打製石器の主要剥離面には、対向方向の剥離が観察されることから、両極打法による楔形石器様の剥片が目的的剥片として獲得され利用されたことがわかる。



第14図 ST1出土石器実測図(1) (S=2/3)



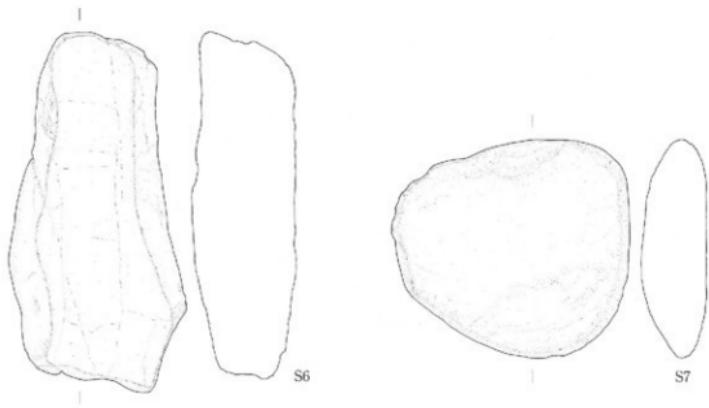
S4



S5

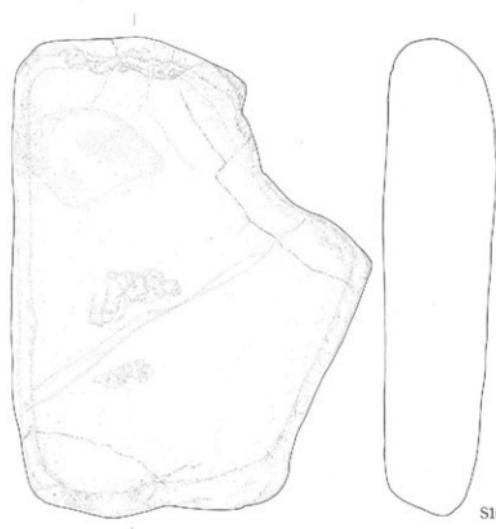
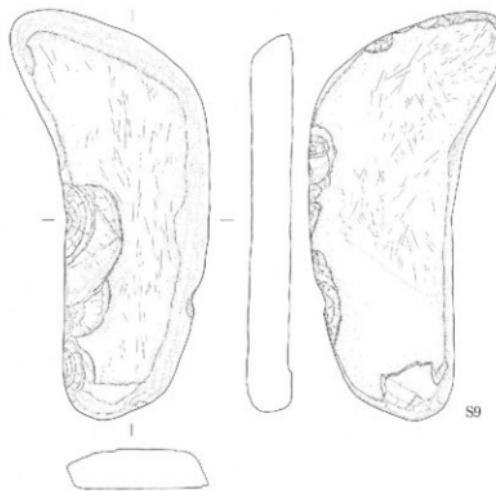
0 10cm

第15図 ST1出土石器実測図(2) (S=1/4)



0 10cm

第16図 ST1出土石器実測図(3) (S=1/4)



0 10cm

第17図 ST1出土石器実測図(4) (S=1/4)

## 磨製石斧

1点のみ出土した磨製石斧（S3）は、扁平片刃石斧である。石材は従来、超塩基性岩（蛇紋岩）製としていた石材だが、粒状構造の観察から「頁岩」としなければならない石材であることがわかった。

この扁平片刃石斧は、田村遺跡群の第2次調査で出土した扁平片刃石斧の中で、V-3期出土の資料（K2区 ST220出土）に類似する。刃部形状において類似するものの、S3は側縁・基部とともに面が作出されており、より丁寧な作りとなっている。

## 敲石類

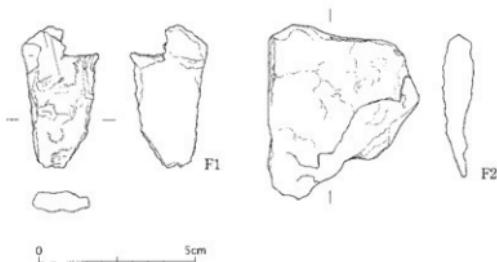
今回出土した敲石類は、いずれも堅穴住居跡からの出土である。小型の敲石類はほとんど出土していない。大型で、大きさ（長さ34cm前後の大きさをもつものが多い）に一定の規格性があることがわかる。

S4～S10が、台石や砥石も含めた敲石類で、いずれも砂岩だがS6・7は褐色に発色する粗粒砂岩で、それ以外は灰白色のより硬質の砂岩である。S5・7・10のように、明瞭な敲打痕が認められるものと、S4・6のように敲打痕がはっきりと確認されないものがある。S8・9は表裏面に擦痕が残り、砥石として使用されたものである。

また、S4・10には表面に紐筋状の痕跡が残る。これらの筋状痕の残る石器の性格は明瞭ではないが、石器の大きさや形状も併せて、その用途を検討する必要がある。

## 鉄器類

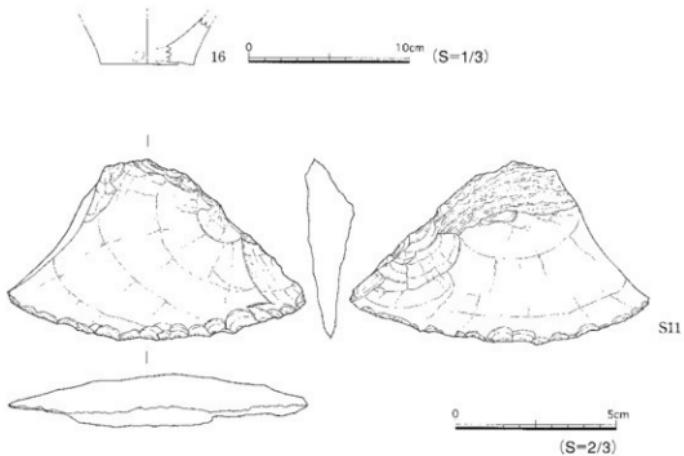
ST1より蟻が出土し、ST1に隣接した包含層から板状鉄斧も出土しており、いずれも弥生時代後期中葉の遺物と思われる。



第18図 ST1出土鉄器実測図 (S=2/3)

## 包含層

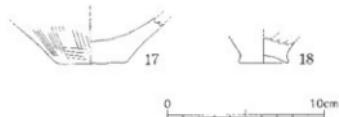
弥生土器の壺（16）、その他弥生土器を含んだ上器片226点が出土している。



第19図 包含層出土遺物実測図

### 第3節 試掘調査時の出土遺物

試掘時にTP5で検出された寺尾遺跡2例目となる竪穴住居跡ST2が確認されている。工事による遺跡に影響を受けないことから試掘坑のみのデータであるが、弥生土器26点が出土している。そのなかで甕の底部1点（16）を図示することができた。また、鉢の破片と考えられる土器やタタキ目を持つ土器が出土するなど、ST1とはほぼ同じ時期の遺構だと考えてよいものと思われる。



第20図 TP5(ST2)出土土器実測図 (S=1/3)

その他の試掘坑からは、他時期の資料も出土している。図示できた遺物の中で、19～21は弥生土器で、いずれも平底の甕の底部である。特徴から弥生時代後期前半～中葉、ST1と同時期と考えられる。弥生上器以外の遺物としては、TP1～II層から出土した（22）の瓦質土器・鍋とTP15～III層から出土した（23）の近世陶器・椀の2点を図示した。図示できなかったものの、TP1・2・3・6・14・15の各試掘坑から、土師器・須恵器・陶磁器など他時期の遺物が出土した。土師器が合計270点出土し、うち180点がTP8に集中している。

弥生時代以外の遺物出土地点及び主な遺物は以下のとおりである。

#### TP1

II層から土師器片40点、須恵器（タタキ目のある甕）1点が出土しているが、詳細な時期は不明。

IV層からは弥生土器片18点が出土した。

#### TP2

弥生土器片120点、近世以降の陶器片や素焼きの擂鉢の小破片が出土している。

#### TP3

土師器片2点が出土。

**TP5**

竪穴住居跡を確認する。遺物は、口縁8点、底部2点を含む弥生土器片194点が出土。

**TP6**

土師器片26点、須恵器片1点が出土。詳細な時期不明。

**TP8**

土師器片183点が出土。

**TP9**

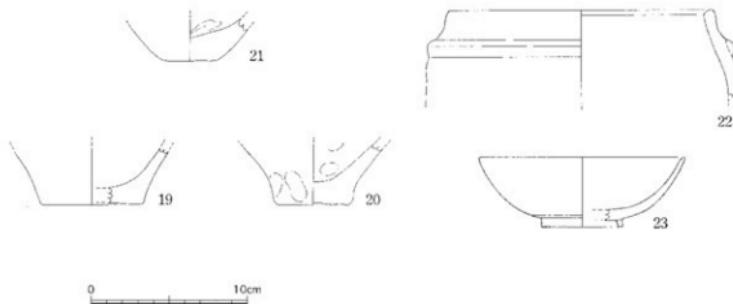
弥生土器片2点及び土師器片3点が出土。

**TP14**

細片も含めて18点の土師器片が出土、うち1点は古代末の輪高台・土師器碗である。

**TP15**

土師器片が7点出土、近世の陶器（23）も出土している。



第21図 試掘調査包含層出土遺物実測図 (S=1/3)

## 第Ⅳ章　まとめ

この寺尾遺跡は、平成16年度に旧夜須町（現香南市）が行った圃場整備工事に伴う事前の試掘調査によって新たに発見された遺跡である。夜須町内の42遺跡で平成15年度以降新たに発見された遺跡は5遺跡、そのうちの中夜須遺跡・シイノニワ遺跡及び当遺跡の3遺跡は旧夜須町が実施した圃場整備工事による試掘調査で確認された。また、国土交通省が行っている高知東部自動車道南伊吹芸道路建設工事により、口横ヶ谷遺跡と坪井遺跡が確認されている。

今回の調査で明らかになった竪穴住居跡2棟は、夜須町で初めて確認された弥生時代の遺構である。平成16年11月に行われた試掘調査で、TP5からST2が確認され、平成17年の立会調査においてもST1が確認された。双方とも同時期の弥生時代後期中葉に属することが判明した。ST1については工事で削平されることから、立会時に発掘調査し記録保存されている。ST2については試掘で一部を調査しているが、大部分はそのままの状態で残されている。

遺物は、弥生時代後期から古代、中世、近世の各時期が確認されている。この中で、中世・近世の遺物は少量であり、実測遺物は2点のみで、それ以外は弥生時代後期中葉に属し、そのほとんどがST1からの出土である。高知平野の弥生土器編年では、V-4期（標識遺跡・香南市野市町深瀬遺跡ST3）にあたり、鉢々器としての鉢型土器が登場し、器種組成の中で一定の割合を占める時期である。また、脚部のみが出土した高环は分割成形であり、底部充填技法が認められるものはなかった。そのほか、撫入遺物である細頸壺（第13図-1）は、胎土の特徴から高松平野周辺から持ちこまれたものだと考えられ注目される。

ST1の特徴として、石器が多く出土している。その中の2点（第15図S4・第17図S10）は何かで縛つてできたような痕跡が確認されているが使途等は不明である。

この時期は、寺尾遺跡の西約10kmにある弥生時代を通じての提点集落田村遺跡群が終焉を迎える時期にあたる。弥生集落は物部川を渡り高知平野東部にも拡散していったと考えられ、竪穴住居跡が確認された当遺跡のある夜須川流域には、ほかにも弥生時代の集落が存在した可能性が高く、周辺の開発等には注意が必要である。

# 遺物觀察表



表3 遺物観察表（弥生土器・瓦質土器・近世陶器）

回収 番号	遺構 層位 出土地点	器種 器形	部位	法量(cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	時期 備考			
				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面					
1	ST1 埋下	弥生土器 ・縦環竈	口縁～ 脚部	(8.0)	(11.7)	—	—	0.5mm前後の微細粒 砂を多く含む。1~ 2mmの大粒の粗粒砂(白 色)を含む。表面はこぼれ 感がある。他の在地土壌とは 異なっている。	10YR 7/3 に赤い 黄褐色	2.5YR 6/4 に赤い 黄褐色	ハケ、 ナデ	ハケ、 ナデ	全体に明るい褐色に発色する。 脚部が頗る伸びる。口径8cm、 口縁～脚部長11cm強の初頭盤 である。口縁脚部は細く立上げる。 投入法だと考えられる。	弥生時代 後期中葉 高台平野 周辺か。			
2	ST1 埋下	弥生土器 ・竈	口縁部	—	(2.9)	—	—	1~2mm大のチャ ー・砂粒を含む。	10YR 7/3 に赤い 黄褐色	10YR 7/3 に赤い 黄褐色	不明	不明	口唇はわざかにふくらむ面をなし、 下端が肥厚する。	弥生時代 後期中葉			
3	ST1 埋下上 ⑤	弥生土器 ・窓	口縁～ 脚部	(18.4)	(15.1)	24.5	—	2~4mm大のチャ ー・砂粒を多量に 含む。	10YR 4/1 に赤い 黄褐色	10YR 4/2 に赤い 黄褐色	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ナデ	タキ、 ナデ、 ユビオサエ、 ナデ	脚部は扭曲、短く外反する。口唇 は曲線ない。窓部外側が肥厚する。 調整は継続できるものの、厚壁が 著しい。	弥生時代 後期中葉			
4	ST1	弥生土器 ・窓	口縁部	(12.4)	(2.4)	—	—	1~3mm大のチャ ー・砂粒をやや 多く含む。	10YR 7/4 に赤い 黄褐色	10YR 7/4 に赤い 黄褐色	ユビオサエ、 ナデ	ハケ、 ユビオサエ	口唇は面をなす。	弥生時代 後期中葉			
5	ST1 検・埋上	弥生土器 ・窓	口縁部	—	(1.9)	—	—	微細粒砂と1mm の大砂粒(チャード) をやや多く含む。 ガラス質遮物も若 干量認められる。	10YR 7/4 に赤い 黄褐色	10YR 7/4 に赤い 黄褐色	ユビオサエ、 ナデ	ユビオサエ、 ナデ	口唇は面をなす。	弥生時代 後期中葉			
6	ST1 検・埋上	弥生土器 ・窓	口縁部	—	(8.0)	—	—	1~2mm大のチャ ー・砂粒をやや 多く含む。	2.5YR 6/4 に赤い 黄褐色	2.5YR 6/4 に赤い 黄褐色	不明	不明	口唇は面をなす。	弥生時代 後期中葉			
7	ST1	弥生土器 ・窓	底部	—	(2.0)	—	(7.6)	1~3mm大のチャ ー・砂粒をやや 多く含む。	10YR 6/6 有茎褐色	10YR 6/6 有茎褐色	不明	不明	半底。	弥生時代 後期中葉			
8	ST1 検・理土	弥生土器 ・窓	底部	—	(5.4)	—	—	2~4mm大のチャ ー・砂粒をやや 多く含む。	10YR 7/4 に赤い 黄褐色	5YR 6/4 に赤い 橙色	不明	不明	単耗盤著で調整不明。半底。	弥生時代 後期中葉			
9	ST1 床下 No.6	弥生土器 ・鉢	口縁～ 底部	(11.4)	6.1	—	(3.4)	1mm前後のチャ ー・砂粒を多く含む。 3~4mm大の粗粒砂も含む。	5Y 4/1 に赤い 灰色	10YR 7/4 に赤い 黄褐色	ユビオサエ、 ナデ	ハケ、 ユビオサエ、 ナデ	口唇は丸く立上げる。底部は半 底で、輪郭の形態、外面のハケ調 整は輪郭をわざかにとどめるのみ である。	弥生時代 後期中葉			
10	ST1 埋下土	弥生土器 ・窓	脚部	—	(10.0)	—	15.0	1~2mm大のチャ ー・砂粒を多く含む。 赤色チャードが 多い。	5YR 7/3 に赤い 黄色	10YR 7/4 に赤い 黄褐色	ハケ、 ナデ、 ユビオサエ、 ユビオサエ	ハケ、 ナデ、 ユビオサエ、 ユビオサエ	脚部は大きく開き、端部は丸みを 帯びた面をなす。内部に段状はけり があり、外縁は下へ1方向のへりを 持つ。脚部の透孔は丸形対称孔、脚部 に斜め窓がある。	弥生時代 後期中葉			
11	ST1 埋土上 No.1	弥生土器 ・窓	脚部	—	(10.0)	—	14.0	精選されており、 0.5mm前後の微 細粒砂を含む。 2mm大の粗粒砂 も認められる。	2.5YR 7/4 に赤い 灰色	10YR 7/4 に赤い 黄褐色	ユビオサエ、 ハラギモ	ユビオサエ、 ハラギモ	脚端部は丸みを帯びた面をなす。 器表の摩耗痕。調整は不正確だが、外縁に残るヘリガシが觀察 できる。	弥生時代 後期中葉			
12	ST1 埋土	弥生土器 ・窓	脚部	—	(6.2)	—	(14.6)	微細粒砂と1mm の大砂粒(チャード) をやや多く含む。	10YR 7/6 有茎褐色	10YR 7/4 に赤い 黄褐色	不明	ハラギモ	器表面の大半は剥離しており、外 面のハリ一筋にへりが残る。透孔は丸の形の残るが、 全体の透孔は少しきずがある。摩耗は 大きく開いて、脚端部は面をなす。	弥生時代 後期中葉			
13	ST1 埋土下 No.7	弥生土器 ・窓	脚部	—	(9.1)	—	—	精選されており、 0.5mm前後の微 細粒砂を含む。 2mm大の粗粒砂 も認められる。	5YR 6/6 有茎褐色	5YR 5/4 に赤い 赤褐色	ナデ、 ユビオサエ	ハラギモ	分割成型による。脚端部形狀不 規則。外縁にヘリガシが調整できる のが、摩耗は進行している。	弥生時代 後期中葉			
14	ST1 No.2	弥生土器 ・窓	脚部	—	(6.6)	—	—	1~2mm大の粗粒 砂(チャード)をや や多く含む。	10YR 8/4 洗黄褐色	10YR 8/4 洗黄褐色	ユビオサエ、 ユビナデ	ハケ、 ユビナデ	透孔は4孔。摩耗痕著で調整不 明現。	弥生時代 後期中葉			
15	ST1 埋土下	弥生土器 ・窓	口縁～ 脚部	—	(6.1)	—	(5.8)	チャード微細粒砂 を含む。約3mmの 粗粒砂も含むが、 少量であり、精選 されている。	2.5YR 8/4 淡黄色	2.5YR 8/4 淡黄色	ユビオサエ、 ユビオサエ	ユビオサエ、 ユビオサエ	脚部は大きく開かず直線的である。 脚端部は細く立上げる。今回出 した他の窓部とは異なり、窓台 に窓の形状である。	弥生時代 後期中葉			

表3 遺物観察表(弥生土器・真貫土器・近世陶器)

団体 番号	遺構 層位 出土地点	器種 器形	部位	法量(cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技術他	時期 備考
				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
				(mm)	(mm)	(mm)	(mm)		SY4/1 灰色	10YR7/4 に近い 黄褐色	ユビオサエ	ユビオサエ		
16	包含層	弥生土器 ・鏡	底部	-	(2.9)	-	(5.6)	1~2mm人のチャート砂粒を多く含む。	SY4/1 灰色	10YR7/4 に近い 黄褐色	ユビオサエ	ユビオサエ	上げ底有味、摩耗顯著で調整不明瞭。	
17	ST2 TP5 Ⅱ層	弥生土器 ・鏡	底部	-	(2.8)	-	4.4	2~3mm人のチャート粗粒砂を多く含む。	SY4/1 灰色	SY3/1 オリーブ 黒色	ハケ。 ユビオサエ。 ナデ	ハケ。	平底。	弥生時代 後期中葉
18	SI2 TP5 Ⅲ層	弥生土器 ・鉢	底部	-	(1.6)	-	2.9	2~3mm人のチャート粗粒砂を多く含む。	10YR8/4 浅黃褐色	10YR8/4 浅黃褐色	不明	ユビオサエ	上げ底。底部外縁が脚部に伸びる。	弥生時代 後期中葉
19	試掘 Ⅱ層	弥生土器 ・鏡	底部	-	(3.5)	-	(6.0)	1~2mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR5/3 に近い 黄褐色	SYR6/4 に近い 褐色	不明	不明	平底。摩耗顯著で内外面とも調 整不明。	
20	試掘 TP10 Ⅲ層	弥生土器 ・鏡	底部	-	(3.8)	-	4.3	0.5mm前後の微 細粒砂を多量に 含む。2mm大の 粗粒砂も認められ る。	SYR7/6 に近い 褐色	SYR7/6 に近い 褐色	ユビオサエ	ユビオサエ	器表の摩滅のため調整不明瞭。 内外面ともユビオサエは確認でき る。	
21	試掘 TP1 Ⅲ層	弥生土器 ・鏡	底部	-	(2.6)	-	3.3	微細粒砂と1~ 3mm大の粗粒砂 (チャート)をやや 多く含む。	2.5Y5/2 地灰褐色	10YR6/3 に近い 黄褐色	ユビオサエ	不明	平底。丸みを帯びた立ち上がり。	
22	試掘 TP1 Ⅲ層	真貫土器 ・鏡	口縁部	(16.0)	(5.4)	-	-	0.5~1mm大のチ ャート砂粒が多く、 2mm前後の粗粒 砂も含んでいる。	SY6/1 灰色	SY7/1 灰色	ナデ	ヨコナデ。 ユビオサエ	I.I級部外縁に断面カマボコ状の 粘土瘤を貼付。肩とする。口縁は 丸く仕上げる。	中世 (14世紀)
23	試掘 TP15 Ⅲ層	近世陶器 ・平楕	口縁~ 底座	(12.6)	4.3	-	(5.0)		2.5YR8/2 灰白色	2.5YR8/2 灰白色	-	-	細部は0.3mm以下と薄く、細かい 凹凸が全面に入る。窓孔は断面 四角形で外縁高台付近は露頭 する。内面見込みに施土跡が残る。	實施あるいは 立瓦焼窯 陶器(近世、 17世紀後半~18世 紀前半)

表4 遺物観察表(石器)

図版番号	器種	石材	遺構 出土地点 層名	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	特徴・備考
S1	打製石器	サスカイト	ST1 床土(P上)	2.9	1.9	4.0	2.0	サスカイトの打製石器。押圧剥離により刃部を形成する。基部形状は平基。刃部は弧状であり、基部も帶く往上げられている。主剥離面に対向方向の剥離面が残る。要素剥片を両極打法により獲得したと考えられる。
S2	打製石器 (有茎打製石器)	サスカイト	ST1 埋土下N62	5.0	2.3	7.5	8.2	サスカイトの根長剥片を要素とする打製有茎石器。背面には理面を残す。基部両側縫からハードハンマーによる間接打撃により、挿入部を成形。基部に有茎部をつくり出す。刃部は押圧剥離により形成する。石器の軸に対して、主剥離面の剥離角は約60°の角度で交わっている。
S3	磨製石斧 (扁平片刃石斧)	真岩	ST1 理土上N4	5.6	8.0	9.0	32.4	扁平な纏素材で、両面からの研磨で刃部を形成する磨製石斧。片方の刃が尖っていない。「扁平片刃石斧」の範疇で扱われる石斧である。部分的に理面を残すものの、全面を研磨して刃に仕上げている。基部と両側縫は研磨により面をなす。田村遺跡群後期前半の壘穴住居跡出土の扁平片刃石斧と形状が類似している。濃褐色で、從来、粗面基底岩(蛇紋岩)としていた石材だが、今回、真岩であるとの指摘をいただき、石材名を変更した。
S4	砾石類(台石)	砂岩	ST1 横面 (ST東側)	20.6	22.3	4.1	2,100	灰白色(5Y7/1~7/2)に発色する砂岩。頭端に凹部も認められるが、敲打痕かどうかはつきりしない。表面に1mm前後の幅で漸状のウイングがある。粗状のものでのこの扁平盤を導いて利用した可能性が考えられる。
S5	砾石類(台石)	砂岩	ST1	33.4	35.3	10.6	12,500	灰白色(5Y7/2)に発色する、厚みのある扁平な砂岩である。断縫は面をなし、敲打痕が残る。端部縫縫には敲打により凹状になった部分がある。表面とともに敲打痕があり、作業台として利用されたものと考えられる。表面には亜甲状のひび割れが入っている。
S6	砾石類(台石?)	砂岩 (粗粒砂岩)	ST1 埋土下N10	29.8	14.5	8.4	4,500	表面が褐色(にい)黄褐色10YR5/4)に発色する。粒径1~2mm前後の粗い砂粒でできた粗粒砂岩。壘穴住居跡から出土しており、台石として取り扱われる。明瞭な敲打痕は認められない。用途の特定はできないが、何らかの形で利用されていた石器だと考えられる。
S7	砾石類(台石)	砂岩 (粗粒砂岩)	ST1 埋土下N2	19.5	18.0	5.5	1,900	粒径1mm前後の粗い粒子の砂岩であり、褐色(にい)黄褐色10YR5/4)にい)黄褐色10YR6/4)に発色する。扁平な円錐素材で、角縫に敲打による剥離が認められる。表面に若干の凹凸があるものの、敲打によるもののかどうかは明瞭でない。作業台として利用された可能性がある。
S8	砾石・台石	砂岩	ST1 埋土下N9	34.3	27.7	7.4	8,900	灰白色(5Y7/1~7/2)に発色する扁平な砂岩円錐を利用した、長さ約34cmと大型の砾石・台石。表面の平坦だがわずかに凹状になった部分3箇所にわざって擦痕がのこり、砾石として利用されていたことがわかる。表面には亜甲状にひび割れが入っている。

表4 遺物観察表(石器)

図版番号	器種	石材	遺構 出土地点 層名	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	特徴・備考
S9	砥石	砂岩	ST1 埋土下	33.9	16.4	3.8	2,200	厚さ3.5cm、長さ約34cmの厚みのある板状の砂岩の表面を砥石として使用する。灰黄色(25Y7/2)に発色している。素材とした石材には層理が発達しており、表面は自然の楕円曲を表面は節理面を利用して平坦な底面を形成している。表面とも側面の角に敲打による剥離が認められる。
S10	敲石類(台石)	砂岩	ST1 換面 (ST裏面)	39.4	29.7	9.0	16,100	灰白色(5Y7/1)に発色する砂岩で、長さ約40cm、厚さ9cmと大型の竹石である。表面に敲打痕と幅1~2mmの柱筋状に残る痕跡が確認される。作業台として使われた台石だと考えられるが、絶状の痕跡については留意しておく必要がある。
S11	刮器 (スクライバー)	サヌカイト	B1区 包含層	9.3	5.7	1.6	55.3	サヌカイトの横長削片を素材としたスクライバー(削器)。刃部の末端辺を刃部として使用する。刃部は、背側両面から施された押圧剥離によって形成されている。腹面と背面の剥離線は約70°の角度で交わっており、削片獲得の過程で打面転移が行われたことがわかる。

表5 遺物観察表(鉄器)

図版番号	器種	出土地点・遺構	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	特徴・備考
F1	莖(たがね)	ST1	4.4	2.4	0.65	10.3	下端にかけて細くなる。
F2	板状鉄片	B1区 包含層	4.6	5.4	0.9	45.8	板状で、刃部が一部欠ける。

# 写真図版



試掘TP5

確認された竪穴住居(ST2)  
セクション



試掘TP5 焼土と炭化物(ST2)



試掘TP8 検出された柱穴



試掘TP1 出土遺物(磨製石斧)



試掘TP1 堆積状況

試掘調査の成果

写真図版2



遺構検出状況(A区東)



遺構完掘状況(A区東)



遺構検出状況(A区西)



遺構検出状況(A区西)



A区の調査  
A区の全景(北東方向から)



圃場整備工事中、立会調査で見つかった竪穴住居跡

写真図版4



ST1 検出状況



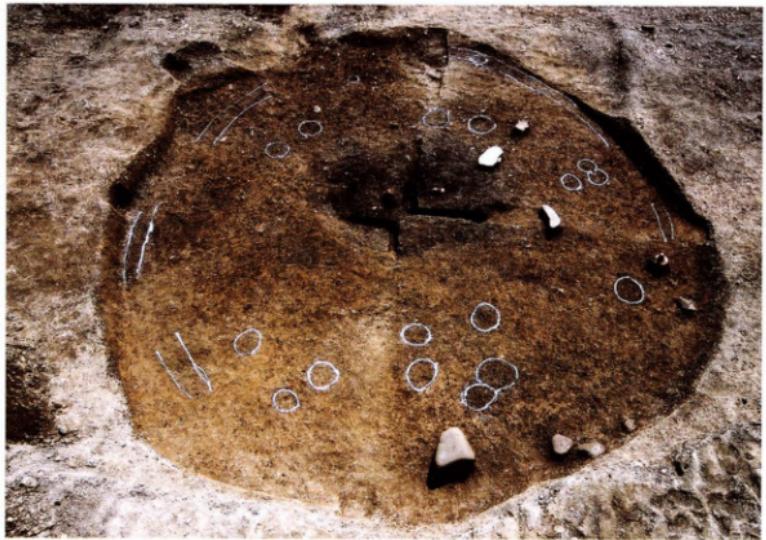
ST1 堆積状況



ST1 堆積状況

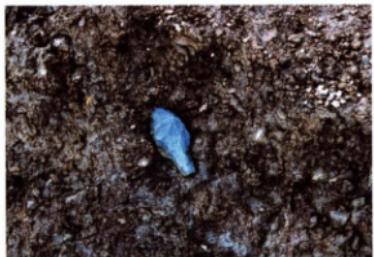


ST1 遺物出土状況



ST1 床面構造検出状況

写真図版6



有茎打製石鐵 (S2)



スクレイバー (S11)



砥石 (S9)



ST1 床面遺構と遺物出土状況



ST1 中央ピット 焼土・炭化物と周辺の状況



ST1と周辺の景観



ST1 完掘状況

写真図版8



竪穴住居跡と調査参加メンバー



竪穴住居跡(ST1)調査風景



水路工事 立会調査



A区調査風景

写真図版 10



ST1出土遺物(壺・甕・鉢 1~9) 及び ST2 出土遺物(甕・鉢 16・17)



ST1出土遺物(弥生土器 高杯)

写真図版 12



S1



S2



S3



F1



F2



S11

ST1出土遺物(打製石鎌・扁平片刃石斧、鉄製品-F1) 及び 包含層出土遺物(スクレイバー、鉄製品-F2)



S7



S4



S9



S8

ST1出土遺物(敲石類、台石・砥石)



S6



S5



S10



TP14 出土 青磁



22

TP1



23

TP15

ST1出土遺物(敲石類、台石・砥石) 及び 試掘調査出土遺物(青磁・瓦質土器・近世陶器)

## 報告書抄録

ふりがな	てらおいせき							
書名	寺尾遺跡							
副書名	中山間総合整備事業寺尾工区圃場整備工事に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	高知県香南市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	山本八也・松村信博							
編集機関	高知県香南市教育委員会 香南市文化財センター							
所在地	〒781-5453 高知県香南市香我美町山北1553-1 TEL 0887-54-2296							
発行年月日	平成23年3月25日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
てらおい 寺尾遺跡	こうちけん 高知県 こうなんし 香南市 やまとちょう 夜須町 かみやす 上夜須	市町村 39211	遺跡番号 210038	33度 33分 7秒	133度 46分 34秒	平成17年 3月14日 ～ 平成17年 4月25日	800m <sup>2</sup>	圃場整備 工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
寺尾遺跡	集落跡	弥生時代	ピット 竪穴 住居跡	弥生土器 石器 鉄器		弥生時代後期中葉の 竪穴住居跡を確認		

高知県香南市発掘調査報告書第7集

## 寺尾遺跡

中山間総合整備事業寺尾工区圃場整備工事に伴う発掘調査報告

---

2011年3月

発行 高知県香南市教育委員会

香南市文化財センター

〒781-5334 高知県香南市香我美町山北1553-1

電話 0887-54-2296

印刷 香南市野市町西野45

半田印刷